

わが国における麻酔学書史 (第1報)

谷 津 三 雄* 中 川 圭 介**
大 場 重 信*** 古 谷 尚 武****

緒 言

既刊の日本医学史^{1,2)}における麻酔の歴史をみるに華岡青洲による通仙散は必ずとりあげられていても麻酔学書史については記載がないかあっても極めて簡単にすぎない。

しかし麻酔学の発達史の研究には麻酔学書史の研究は重要である。

そこで私蔵の蔵書から麻酔に関する成書、外科総論のなかの麻酔、歯学書のなかの麻酔などに大別し、特にその序文や凡例を中心に考証し麻酔学書史の一端としたい。

研究資料と方法

明治年代に刊行された 1. ドクトルシキライヒ原著³⁾、寺田織尾纂訳：無痛手術，全，明治32年1月刊，金原医籍発行。 2. 細谷雄太，永野重業共編⁴⁾：近世局所麻酔，明治43年4月刊，半田屋発行。 3. 頓宮 寛著⁵⁾，薦骨及腰髄麻酔法，明治45年3月刊，南山堂発行。 4. チルマン氏原著，田代義徳訳述：智児曼斯氏外科総論，明治30年4月刊（初版），南江堂発行。 5. 下平用彩著：新纂外科総論，明治39年12月刊（初版）。 6. 川村泰次郎著：簡明外科汎論，明治39年9月刊，博文館発行。 7. 和辻春次，大村秀畝共訳：忽歇児氏 外科手術学，明治31年6月刊，朝香屋発行。 8. 佐藤運雄著：歯科学通論，前編，明治40年3月刊（初版），歯科学報社発行。 9. 渡辺房吉著：臨床救急

療法，明治45年1月刊，南江堂発行などの資料から今回は麻酔学成書について金子準二編著⁶⁾：日本精神病学書史（日本精神病院協会発行，昭和40年1月刊）に準じて解題を試み，更に今日の麻酔学と比較しつつその内容について検討した。

研究成績

1. ドクトルシキライヒ原著，寺田織尾纂訳：無痛手術，全，明治32年1月刊，金原医籍発行，15×21.5 cm，p. 220，1円。

1898年7月伯林ニ於テという著者シキライヒの序文が4ページに亘って記されているが，そのなかに無痛法といえは全身麻酔による法が専らであった時代に局所麻酔（浸潤麻酔）に対する批判が「予カ外科医協会ニ於テ始メテ予ノ浸潤麻痺ノ処置ヲ実地ニ説述スルノ榮譽ヲ有シタルハ実ニ1894年ナリキ，外科専門ノ泰斗エ・フォン・ベルグマン氏が予ノ浸潤麻痺ノ「外科ニ対シテ裨益スル所決シテ僅少ナラス」トノ承認ノ辞ヲ与ヘラレシモ亦此時ナリキ，爾来予ノ浸潤麻痺ニ対スル反抗ハ漸ク其跡ヲ収メントシ同僚諸氏ノ如キモ益此処置ノ局所疼痛麻痺ニ有効ナルコトヲ認メラルルニ至レリ」の一文より知ることができる。また「此書始メニ精神的並物理的ノ全身麻酔，解剖並ニ其睡眠ノ状態ヲ知ランガ為ノ試験ヲ挙ケ終ニ吸入麻酔ノ危険ヲ除クコトノ原則上不可能ノモノナルヲ示サンコトヲ目的トセリ……茲ニハ全身麻酔ニ附加シテ手術上ノ技術ヲモ網羅セリ，是予ガ最近3年間予ノ浸潤麻痺ヲ以テ実行シタル所ノモノニシテ今ヤ手術ノ数殆ンド3千ニ達セントセリ，予ハ予ノ処置ノ今日マデ如何ニ発達シタルカラ詳細ニ説述スベキ任務アリト信ズ」の記載から吸入麻酔の副作用を如何に予防するかによって局所麻酔の

Historical Books of Anaesthesiology in Japan
(part I)

*Mitsuo Yatsu **Keisuke Nakagawa

Sigenobu Oba *Naotake Huruya

Department of Anaesthesiology, Nihon University
School of Dentistry, Matsudo

(Director: Prof. Mitsuo Yatsu)

必要性を説くことを目的としている点、その並々ならぬ苦心の程が知られるし、更に本書は3,000例の経験をふまえての記載でありながら、「但浸潤麻痺ノ場合ト雖ドモ亦練習実験ノ欲クベカラザルコトハ固ヨリ論ヲ待タズ」とその豊富な経験の必要性を強調している点は蓋し卓見であり、これは“医”修得上の鉄則であろう。

また、訳者の凡例には「吸入麻醉ハ冗煩ニシテ危険ノ惧アリ、局処麻痺法ハ簡ハ則チ簡ナレドモ猶ホ中毒ノ患アルヲ免レズ故ニ世ノ此ノ欠点ヲ補足スル新方法ヲ翹望スルコト蓋シ大早ノ雲霓モ奮ナラザルナリ、而ルニ予頃者独乙国ニ遊ビ彼国大医シキライヒ氏ニ就テ其創見ニ係ル浸潤麻痺法ヲ資スニ用意周到技術ノ簡易最モ実地家ニ適切ニシテ而モ危険ノ虞ナク中毒ノ恐ナシ、洵ニ是レ世ノ翹望ヲ充シテ毫モ遺憾ナカラシムルモノト謂フベシ、此ニ於テカ意ヲ沢シテ氏ノ著無痛手術篇中ニ就テ其前篇理論ニ関スルモノヲ去リ、後篇実地の応用ニ最モ剴切ナルモノノミヲ撰ビ此ノ纂記ヲナスニ至レリ……」から訳者がドイツに留学し浸潤麻酔をシキライヒ氏に師事し修得、その著書のうち理論篇を除き応用篇のみを訳したことがわかる。従って後述する目次からもシキライヒの序文にある吸入麻酔が記されていないのはこのためであろう。

無痛手術 目次

緒論

第1章：局所麻痺（浸潤麻痺）ニ関スル理論

〃 2 〃：浸潤及人工水腫ノ意義

〃 3 〃：外見上ノ危険

〃 4 〃：浸潤麻痺ニ関スル溶液及器具

〃 5 〃：浸潤麻痺ニ於ケル各個手術上ノ技術

第1節：皮膚截開

〃 2 〃：深部ニ於ケル水腫形成

〃 3 〃：縫合

〃 4 〃：止血

〃 5 〃：炎症部位

〃 6 〃：損傷

〃 7 〃：創傷及其連続部ニ於ケル脈管結紮

第1：舌動脈結紮

第2：顳動脈結紮

〃 3 〃：浅掌動脈弓結紮

第8節：第I期及第II期縫合

〃 9 〃：筋及腱ノ手術

〃 10 〃：神経幹ノ麻痺、対神経痛浸潤、偽症及麻痺

〃 11 〃：異物及炎症竈（癰腫其他）

〃 12 〃：切除、截断及関節離断

第6章：手術各論

第1節：頭部、頸部及胸部ノ手術

〃 2 〃：抜歯

上顎前歯

下顎前歯

上顎後歯

下顎臼歯

第3節：胸部ニ於ケル手術追加

乳腺炎及乳房切断、膿瘍

第4節 腹部及背部ノ手術、卵巢囊腫摘出、子宮腹壁固定、脱腸手術、

胃ノ瘻孔、膽嚢切開、盲腸周囲炎、腎臓固定法

第5節：肛門、膀胱及生殖器ノ手術

〃 6 〃：下脚潰瘍（輪状切法）瘰癧、蜂窩織炎

〃 7 〃：チールシキ氏植皮術

第7章：吸入法ニ対スル浸潤法

浸潤麻痺ノ方法ニ対スル理論上ノ駁撃

第1節：水腫及伝染

〃 2 〃新奇ナラズ

〃 3 〃：冗煩及時間ノ徒費

〃 4 〃：小手術及大手術

〃 5 〃：後発疼痛

〃 6 〃：説得

〃 7 〃：技術ノ変更

第8章：浸潤麻痺ノ未来

初期手術及外科的予防法

実地家ト外科術

第9章：連合麻痺

とこの目次からみて今日の麻酔学の教科書と比較しほとんど遜色がない。

緒論に「予曩ニ麻酔特ニ哥囉仿謨麻酔ハ患者ノ生命健康ニ危害ヲ及ボスモノニアラザルナキヤヲ

疑ヒ頗ル是ガ研究ニ力ヲ用ヒ…現実ニ疼痛ヲ感ゼシムルコトナク身体ノ切開ヲ行フ方法ヲ案出シテ以テ之ニ代用セシムベキハ予ガ当然ノ義務ナルヲ信ス……然ラバ之ニ代用ス可キ方法トハ何ゾヤ予ノ所謂局所浸潤麻醉法即是ナリ局所麻痺法（即チ浸潤ニ因スル麻痺，中和性ノ溶液ヲ以テスル手術部ノ人工的水腫発生ニ因スル麻痺）ハ醫師ヲシテ凡テ此方法ヲ採ラシムレバ少クトモ総麻醉ノ九十%ヲ排擠スルコトヲ得ベシ……是レ予ガ此方法ヲ公ニシテ如何ニ其使用ニ堪ヘタルカラ示シ以テ世ノ非難者ニ陣頭ニ見エント欲スル所以ナリ，要スルニ微意ノ存スル所ハ麻醉ノ犠牲トナルベキ人命ヲ救助シ且「醫師ハ原病ヨリモ危険ナル薬剤ヲ使用スルコトヲ憚カラザル者ナリ」トノ世ノ批判中ヨリシテ醫師社会ヲ救ヒ出サントスルニアリ……此著ノ如キモ浸潤麻痺ノ技術ヲシテ各人ニ了解セシメントスルニ外ナラズ」と記載されていることからクロロホルム麻酔の危険性を防止する方法からコカインによる人工的水腫発生即ち今日の膨疹（Quaddel）形成による浸潤麻酔のすぐれている点を強調し，しかもこの方法を浸潤に因する麻痺と述べ予ノ所謂局所浸潤麻醉法と命名していることは麻酔史上銘記されなければならない史実である。

第1章の局所麻痺（浸潤麻痺）ニ関スル理論には，従来の局所麻痺の「寒冷麻痺ト根本的差異アルハ知覚遮断ノ目的ヲ以テ薬剤ヲ組織中ニ融合セシムルニ在リ，蓋シ場合ニ於テハ異性ノ薬剤（組織液ト異性ノ意）ト周囲神経実質トノ触接ヲ起シ是ニ由テ神経機能ハ遮断セラルルモノナルベシ…此薬剤ハ所謂前駆疼痛ヲ喚起セズシテ組織内若シクハ粘膜面ニ存スル知覚神経末端ノ鋭敏ナル作用ヲ絶滅セシムルモノニシテ，就中古加乙涅格魯兒水素酸ヲ以テ其最タルモノトス」と述べコカインがオイカイン，ホロカイン，トロバコカインなどを使用し実験を行なった結果からすぐれていると述べながらも「2乃至5%古加乙涅液麻痺ハ実ニ嘔囉仿麻酔ヨリモ危険ノ度ノ甚シキコトハ敢テ疑ヒ容ルベカラザル所タリ，假令不幸ヲ既墜ニ救済セン場合固ヨリ少ナントセズト雖トモ苟モ麻痺者総数ノ殆ント七十五%ヲシテ心臓衰弱，虚脱，冷汗，精神恐怖等ニ陥ラシメタル藥物ヲ以テ嘔囉仿



図 1

護ト同列ニ配セントス」と述べコカインの中毒はクロロホルムの危険性と同一視している点は今日の麻酔学からしても正しい。そしてこのコカインの中毒を除くために第2章浸潤及人工水腫ノ意義の項で従来まで1~5%のコカイン液を真皮に注射していたのを「プラワッツ氏注射器ヲ取テ其針ノ裂口ノ被覆部迄直接ニ表皮ノ下層ニ刺入シ寒子ヲ圧スル時ハ甚シク隆起スル白色水泡ノ形成セララルヲ見ルベシ，此ノ水泡ノ範圍ハ隆起セル皮膚内ニ更ニ注射ヲ續スルトキハ随意ニ之ヲ拡張スルヲ得ベシ」と述べ今日の Quaddel の作成方法と全く同じテクニックを教え，また「1%以下の古加乙涅液ニヨル皮下療法水泡ノ試験ハ其成績実ニ驚クニ足ルモノアリ，即チ0.02%液ハ僅微ノ注射疼痛（水泡形成時ノ疼痛）ヲモ起スコトナクシテ浸潤部ニ完全ノ無感覚ヲ発生セシメ得タリ，又其発生セル白色ニシテ隆起セル蚊ノ刺傷ニ類似セル水泡ノ近囲ニハ完全ナル知覚ヲ存シ毫モ知覚減少ヲ来サザルナリ，故ニ蒸留水百分ニ対スル0.02ノ古加乙涅ハ其用量ノ最低限ニシテ之レニヨリテ能ク前駆期ノ知覚過敏ヲ存セザル麻痺ヲ発生セシメ得ルモノトス」と述べ p. 20~40 にわたり詳述し



図 2

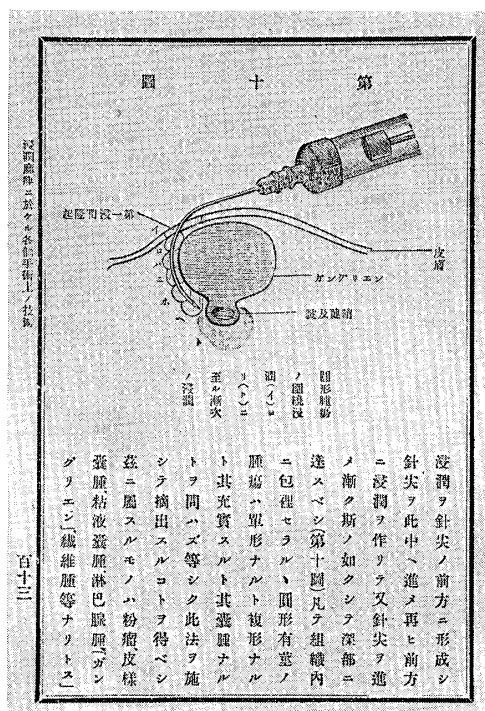


図 3

更に今日の麻酔学書に掲載されている Quaddel 作成法と全く同一の図がのっている(図1). また「浸潤麻痺ニ於ケル各個手術上ノ技術」篇には図2, 3に示すように炎症のある部位に対する浸潤麻痺法やガングリオンを例にとり円形腫瘍の圍繞浸潤として今日においても臨床上重要なコツについてふれている. 何れにせよ1~5%で使用していたものを0.02%の低濃度でよいと述べるにはかなりの反対と批判もあったらうと思われることから本書は局所麻酔史上歴史的な名著である.

2. 細谷雄太, 永野重業著: 近世局所麻酔全, 明治43年刊, 半田屋医籍, p. 384, 15.5×23 cm, 1円80銭

序に「都人士ハ過敏ニシテ地方ノ野夫ハ多ク疼痛ヲ忍ブ從テ市街ニ門戸ヲ構フル医家ハ日常患者ニ接スルニ診断ヲ正確ニシ適薬ヲ興フルモ猶ホ或物ヲ希求セラルベシ……マタ或物ノ猶ホ必要ナリ, 即チ都下ノ患者ガ希求スル或物ハ疼痛ノ減少ナリ, 彼等ハ「疼クテ困ル」ト常ニ医家ニ訴フルナリ……僅微ノ疼痛モ亦到底忍ハザルモノノ如シ. 地方ニ在リテハ検診ヲ精シウシ為メニ多少ノ疼痛ヲ興フルモ却テ老婆心切ヲ喜バルレド一旦刀

ヲ執リ血ヲ流スルノ場合ハ大過ナキヲ期スベク或ハ小過ニシテモアランカ永劫ニ患者ノ影ヲ見ザルニ至ラン……地方患者ニ対スル或物ハ疼痛減少ノ外ニ流血ヲ防止スルノ事ナリ……」本書ハ即チ局所ニ於ケル麻痺法ヲ説キ猶ホ止血法ニ就イテ大イニ留意セリ」と痛みと出血に対する都会人と地方人との感受性の差異から書きはじめてるのは他書に比してより臨床的で面白い.

また「診断学ノ必要ナル治療学ノ不可缺ナル論ヲ俟ザルモ猶ホ全身ノ部位々々ニ於ケル知覚ヲ脱失スルノ一科忘ルベカラザルナリ」と麻酔科の必要性を強調しているのは実に卓見である.

目次

総論

1. 知覚及ビ疼痛
2. 神経圧迫及ビ貧血
3. 寒冷麻痺法
4. 膨浸麻痺法
5. 中性物質及ビ変性物質
9. 局所麻酔

- 1) コカイン, 2) トロパコカイン, 3) オイカイン, 4) ホロカイン, 5) アネズン, 6) ア

コイン, 7) オルトホルム属麻痺剤, 8) ストワイン, 9) アリピン, 10) ノボカイン.

7. 局所麻酔補足法
8. 局所麻酔剤用法
9. 局所麻痺適応症, 禁忌症及ビ其一般形式
(注: 1~9の番号は著者が附した)

各 論

第1章: 頭部手術

1. 長髪頭部及ビ前額手術
2. 聴器手術
3. 顔面手術
4. 眼科手術
5. 鼻腔及ビ副鼻腔手術
6. 抜歯並ニ歯槽突起手術
7. 口腔並ニ咽頭手術

第2章: 頸部及ビ胸部手術

1. 頸部手術
2. 胸部手術

第3章: 腹部手術

第4章: 泌尿生殖器手術

第5章: 肛門部手術

第6章: 上肢手術

第7章: 下肢手術

3. 頓宮 寛著: 薦骨及腰髄麻酔法, 全, 明治45年3月刊, 南山堂発行, 15×22.5 cm, p. 103, 60銭.

序に「河豚ヲ喰ハズンバ以テ河豚ノ味ヲ語ルニ足ラズ, 世ニ「喰ハズ嫌ヒ」ノ徒アリ. 自ラ経験スルコト無クシテ徒ニ他ヲ排セントス, 余先般外科学会ニ臨ミ腰髄麻酔法不必要ヲ談ゼシ某老大家ヲ記憶セリ, 余ハ信ズ日ニ月ニ進歩発展ヲ重ネツツアル今日ノ医学界ニ於テ徒ラニ陣腐ノ学説技術ニノミ拘泥スルハ蓋シ識者ノトラザル所ニシテ斯ノ輓近長足ノ改良進歩ヲ得タル腰髄麻酔法ノ如キハ全身麻酔法ト共ニ吾人外科医ノ生命ニシテ然モ河豚ノ如キ危険ナルモノニ非ザルコトヲ, 余ガ浅学ヲモ顧ミズココニ一書ヲ公ニシタルハ是等「喰ハズ嫌ヒ」ノ徒ニ反省ヲ求ムル為メナリトス」

明治45年3月上旬

三井慈善病院ニ於テ
頓宮 寛

から著者の頓宮氏は熱血漢であることを知るばかりでなく「腰髄麻酔法, 全身麻酔法ト共ニ吾人外科医ノ生命ニシテ」と64年前に強調していることは全身麻酔の発達した今日といえども腰髄麻酔の占める位置の大きいことを考えれば卓見といわざるをえない.

目 次

第1章: 薦骨麻酔法

1. 歴史
2. 薦骨部ノ解剖的關係
3. 注射液ノ製法及ビ消毒法
4. 局所麻酔溶液ト加水分解
5. ノボカイン重曹食塩溶液ノ局所麻酔力
6. ノボカインノ極量ト同溶液ノ用量
7. 注射器及ビ其消毒法
8. 皮膚消毒法
9. 患者ノ位置
10. 注射ノ部位及ビ注射法
11. 注射後ノ所置
12. 麻酔ノ部位
13. 麻酔時間
14. 薦骨麻酔ノ本態
15. 副作用及ビ後作用
16. 薦骨麻酔法ノ適応症
17. 薦骨麻酔法ノ特長
18. 薦骨麻酔法ノ欽点
19. 実験例

(注: 1~19の番号は著者が附した)

第2章: 腰髄麻酔法

1. 歴史
2. 解剖的關係
3. 脳脊髄液
4. 麻酔薬ノ撰定
5. 麻酔薬ノ神経中枢ニ及ボス影響
6. 麻酔薬消毒法
7. 皮膚消毒法
8. 注射用器械及ビ其消毒法
9. 薬物の用量及ビ使用法
10. 注射ノ部位
11. 被術者ノ位置
12. 注射法

13. 注射ノ困難
 14. 注射後ノ処置
 15. 麻酔ノ持續時間
 16. 麻酔ノ部位
 17. 麻酔時ノ状態
 18. 麻酔ノ効果
 19. 他ノ麻酔法ノ併用
 20. 副作用及ビ後作用
 21. 腰髄麻酔法ノ適応症
 22. 腰髄麻酔法ノ禁忌症
 23. 腰髄麻酔法ノ特長
 24. 腰髄麻酔法ノ缺点
- (注：1～24の番号は著者が附した)

第3章：ヨンネスク氏高部脊髄麻酔法

1. 麻酔薬及ビ其使用法
2. 注射器
3. 注射部位ト麻酔薬ノ用量
4. 注射ノ危険

の目次からみて極めて詳細に区分されていることに注目されなければならないばかりでなく、今日の麻酔学書にもこれほど細分されているものは見あたらない。またノボカインのみが目次でゴジックで示されているのは1904年(明治37)はじめてドイツのアルフレッド・アインホルン(ALFRED EINHORN)により合成されて以来、多数の臨床経験をへてすぐれた局所麻酔薬で仙髄や脊椎麻酔にも使用のできる最良の薬物であることを強調している点も、局所麻酔史上特筆されなければならない。また各章のはじめに歴史が記載されていることは医史上貴重な資料である。

考 証

無痛手術の訳者、寺田織尾の人物史については河野二郎編⁷⁾、帝国医鑑(明治43年5月刊、旭興信所発行)に、医学士、東京府士族、神田区綿町3の6、電話、本局1990、専門泌尿生殖器科で「君ハ文久2年(1862)5月17日出生ニテ駿河国沼津城内ニ生レ、旧菊間藩士寺田一尾氏ノ長男ナリ、。明治28年(1895)帝国医科大学ヲ卒業シテ医学士ノ称号ヲ受ケ翌年欧州ニ留学シテ花柳病ノ研究ヲ積ンデ32年(1899)帰朝ス、。同39年(1906)2月日本橋五矢ノ倉町2番地、矢ノ倉医

院ヲ創立シテ院長トナリ現ニ医術開業試験委員、富士瓦斯紡績株式会社、小名木川工場医務長、上毛モスリン会社医務顧問等ヲ嘱託セラル、。外科各論及ビ無痛手術書等ノ著アリ、。嗜好ハ書画、骨董、。夫人績子ハ香川県知事小野田元瀨氏ノ長女ニシテ一男三女アリ」と記されていることから無痛手術は帰朝早々の訳本であることを知る、。なお、Thomas. E. Keys⁸⁾の「麻酔の歴史」によるカール・ルドウイツヒ・シュライヒ(CARL LUDWIGT SCHLEICH)が「無痛手術」Schmerzlose Operationの初版を刊行したのは1894年(明治27年)で、その第4版は1899年(明治32年)であると年表にあることと、人物史並びに本書が明治32年1月刊から考えるとおそらく第3版の訳本と思われる、。また、年表に1892年(明治25年)C.L. Schleichが低濃度のコカインを使用し皮内注射による浸潤麻酔をドイツ外科学会でデモンストレーションを行ったことになっているが、本書の訳本では「予ノ浸潤麻痺ノ処置ヲ実地ニ説述スルノ榮譽ヲ有シタルハ実ニ1894年ナリキ」とある、。もし訳本が正しいとすればこのデモンストレーションと同年に初版を刊行したのであろうか、。しかし信じ難く、年表に示すように1892年が正しいと思われる、。近世局所麻酔の著者、細谷雄太の人物史は帝国医鑑(明治43年刊)によると山形県平民、下谷区茅町2の4、君ハ明治15年(1882)4月28日ヲ以テ生ル、山形県西村山郡谷地甲八十番地ハ其原籍也、明治42年(1909)5月31日医科大学ヲ卒業シ現ニ研究中」と卒業直後のことについて記されているが、井関九郎著⁹⁾「博士人物」(大正14年5月刊)には「近く海外留学より帰朝せる医博細谷雄太は東大系岡田博士の高弟にして、台湾医専教授より転じて今は耳鼻咽喉科教授として、千葉医大に在り、近来学界に瞩目せらるる人物也、細谷は明治40年東大医科の出身にして卒業後直ちに副手より助手となり大正元年台湾医専教授に任じ、同6年以来欧州に留学し主として瑞西、獨逸にて耳鼻咽喉科学を専攻し、同13年春帰朝せり爾来千葉医大教授に任じ今日に至れり、主論文「毒物ノ第八対神経領域に及ボス影響ニ就テ実験的研究」(旧学位令に依り、東大審査)に

より大正11年2月に博士号を受領している。細谷は山形県の人、当年漸く44歳也、年壮気鋭にして有為の資に富み将来多望の学者として嘱望すべき也」と記されていて東大卒業は明治40年が正しく、帝国医鑑に記されている明治42年卒業は誤りである。本書は卒業後東大耳鼻科で岡田教授の指導を受けた3年間の経験をもとに書かれていることがわかる。また、永野重業の人物史については帝国医鑑には記されていないが「博士人物」には内科編に「佐々木隆興系の高弟にして、今は副院長として神奈川県平塚杏雲堂分院に在り、永野は明治41年東大医科出身にして、同学副手に次で助手となり、同43年以来杏雲堂医院副院長として平塚分院に勤務し今日に至れり、神奈川県大山町の人、当時漸く46歳也、讀書家にして殊に文藝に興味を有し、雨山を号とす。其の文筆雅健にして曲折に富む、また医界の文才といふべし」とあるから本書が刊行された明治43年には既に東京にはおらず平塚にいたので帝国医鑑には記されていないのであろう。また、他書に類をみない序文にかかれた文才はおそらく永野の筆によるものであろう。薦骨及腰髄麻醉法の著者、頓宮寛の人物史は「博士人物」によると「明治43年東大医科を出で卒業後私立真泉病院に勤め、兼て日本医専教授、次で支那大治、漢治萍煤鉄会社の招聘に依り同地に赴任し、幾何もなく支那上海佐々木病院跡を買収して福民医院を創設し之れが院長たり」とあって本書は卒業後2年の著書となるが、その序に記してある三井慈善病院がかかれてないので真泉病院と三井慈善病院とは同一病院なのだろうか。

また「頓宮は香川県の人、吾輩未だ其の人物を詳知せずと雖も其の人に対する殆ど眼中人なく、終始一貫、吾不関焉態度を持し更に些の社交的礼意を顧みざるは天稟其の頑固にして孤立狷介の性癖ありとはいへ、徳富蘇峰の言へる所謂、非常識の骨頂にして教育に中毒したる秀才にあらざれば、准秀才の徒に類するものにあらざる乎、当世の学者としては其狭量たるを寧ろ憐むべき也」と批判されているが64年前の序文にみられるような全身麻醉と腰髄麻醉は今日共に外科医の生命になっていることを考えれば狭量どころか先見の明の

ある人物であると同時に激昂型の人物であったのではないだろうか。

結 語

著者らはわが国における麻醉学書史の研究のないことに着目し、ドクトル・シキライヒ原著、寺田織尾纂訳：無痛手術、全（明治32年1月刊）、細谷雄太、永野重業共編：近世局所麻醉（明治43年4月刊）、頓宮 寛著：薦骨及腰髄麻醉法（明治45年3月刊）の3種類の麻醉に関する単行本を資料とし、序文や凡例を中心に書史的に考証し次の結果をえた。

1. ドクトル・シキライヒ原著、寺田織尾纂訳：無痛手術、全は寺田がドイツに留学中直接にC.L. Schleich に師事して修得した局所麻醉法の手技にC.L. Schleich 著 Schmerzlose Operation の第3版の訳本をもとにして書いたわが国における最初の麻醉学の単行本であり、更に本書によりQuaddle 作成による浸潤麻醉法と0.02%の低濃度のコカインの使用は当時全盛であったクロロホルム麻醉に優ることを3,000例以上の豊富な経験をもとに力説し批判から同意をうるまでの苦勞の推移がわかる歴史上の名著であることを明らかにした。

2. 細谷雄太、永野重業著、近世局所麻醉、全は臨床医家は無痛と出血に対し留意すべきことを説き、そのためにも麻醉科の独立の必要性を66年前に説いているが、今日の麻醉科の独立を考えると感無量である。麻醉法の手技や諸注意については東大耳鼻科で経験をつんだ細谷が、また文章の随所にみられる名文からおそらく読書家で文才に富み、雨山と号していた内科医の永野の筆によるものであろう。

3. 頓宮 寛著、薦骨及腰髄麻醉法は、東大卒業後2年の著であるが、その整然に細分された目次と内容からみると大変な努力家であったと思われるのみならず序文に全身麻醉と腰髄麻醉とは外科医の生命であるとの一文は発達した今日の麻醉においてもなんら変らない。

参 考 文 献

- 1) 富士川游：日本医学史。医事通信社，昭和47年

- (1972) 8 月.
- 2) 石原 明：医史学概説. 医学書院, 昭和 30 年 (1955) 9 月.
 - 3) ドクトル・シキライヒ原著, 寺田織尾纂訳：無痛手術, 全. 金原医籍, 明治32年(1899) 1 月.
 - 4) 細谷雄太, 永野重業：近世局所麻醉. 半田屋医籍, 明治43年(1910) 4 月.
 - 5) 頓宮 寛：薦骨及腰髄麻醉法, 全. 南山堂, 明治45年(1912) 3 月.
 - 6) 金子準二：日本精神病学書史. 日本精神病院協会, 昭和40年(1965) 1 月.
 - 7) 河野二郎：帝国医鑑. 旭興信所, 明治 43 年 (1910) 5 月.
 - 8) Thomas, E. Keys: Die Geschichte der Chirurgischen Anaesthesie Springer-Verlag. Berlin, Heidelberg, New York, 1968.
 - 9) 井関九郎：批判研究, 博士人物. 医科篇. 発展社出版, 大正14年(1925) 5 月.